

近畿の点字図書館の4割にまで迫る公共図書館の録音図書製作

昨年、10月に近畿視覚障害者情報サービス研究協議会（略称：近畿視情協 加盟館、点図13館、公共図書館35館）の「録音製作委員会」が実施した、「録音図書製作に関するアンケート」の結果が出た。

アンケートを実施した目的は、①録音図書作りに職員がどのように関わっているか、②音声訳ボランティアへのケアはどうしているか、③講習会の内容はどうなっているか、などについて実態を調べることであった。

調査結果は、いろいろな問題点が明らかになったが、その中で、公共図書館が予想以上に録音図書を所蔵し、製作もしているということが明らかになった。加盟公共図書館の24館（75%）が録音図書を所蔵し、また、7割弱の19館で録音図書を製作している。その製作の中身は、自館で製作している館が10館、グループへ製作委託している館が10館（1館が重複回答）である。この19館の製作量は、既に近畿の点字図書館の製作の4割弱にまで迫っている。公共図書館で製作されている録音図書は国立国会図書館のデータにのり、全国的にも利用されている。

しかし、録音図書の製作に関して職員がどこまで関わっているか、という内容を見ると点字図書館でも、読み方の指導、処理、ボランティアの養成、録音の仕方など十分行えているとはいえない状況があるが、公共図書館においては、調査援助以外ではほとんどグループや音訳者任せになっているといった結果が出ている。

録音図書に対する責任があいまいなままで、蔵書が一人歩きしているといったことにもなっている。

こうしたことから、点字図書館や公共図書館に所属し、「録音図書を製作しているグループ」が集まる「連絡会」的なものの必要性も出てきているようだ。

10月23日に第1回の「グループリーダー懇談会」が近畿視情協の録音製作委員会の主催で開催されるが、これを機会にぜひ「録音図書製作グループの連絡会」が発足していくことを期待している。（清水）



今月の練習問題

* 問題は「思無邪」の処理

司馬遼太郎という人

中西 進

「思無邪」の思想

二月十二日という日が、長い長い一日となった。

午前一時半ごろ、さる新聞社から司馬さんが入院、重体だという電話が入った。大あわてでお宅や姫路文学館の橘川真一副館長に電話したり、また別の新聞社から電話をもらったりした。とにかく様子を見守るしかない。電話をおいて時計を見ると、午前三時であった。九時、生放送があって、私はラジオ局へ出向いた。もう司馬さんの入院は伝わっていて、すでにニュースで流したという。パーソナリティのMさんと司馬さんの偉大さを語り合い、回復を祈りたいとあって、話題をおえた。

家に帰ると、もう妻が、お見舞いの花を送る手配をして来ていた。

しかし夜のテレビ速報は、その死を告げた。朝を待って弔問に出かけることとし、とりあえず弔電だけを打った。またひとしきり新聞社から電話があって、二つの社にコメントを返し、橘川副館長と今夜のことを打ち合わせた。ほっと一息つくと、事の起こりから、ちょうど一日が経過していた。

司馬さんの死が私をこれほどあわてさせたのは、もちろん氏が私のもっとも尊敬する文明批評家であり、親しく接することができた人格者だったからだが、そのほかにも私が館長をつとめる姫路文学館に司馬遼太郎記念室を作りつつあったからである。

五月の開室を目前に、建築、展示がいま大詰めを迎えている。

この開室のための最大の難問は、司馬さんに直筆の書をかいてもらうことであった。一年以上前からお願いをしてあったが、なかなか書はできない。「もう何時でも書けるように筆と硯を机の横に用意してあるのですよ」といって奥様は笑う。今にして思えば、どんなにか億劫なことだったであろう。

その書がやっとできたのは昨年十二月二十七日であった。橘川副館長が膝づめで頂いてきた。

思無邪

あの独特の字が、たっぷりと余白をとって書かれている。ほんのわずかに墨の飛んでいるところがあり、それが揮毫まごうの現場を想像させて、私はほのぼのとした気分になった。

この句は中国最古の古典『詩経』に出てくる。そしてまた『論語』にも登録する。

『論語』では、孔子が『詩経』の詩の特徴を、

思おも 邪よこしま無し

つまり邪心がないことだ、といったとするのである。司馬さんは邪心のなさを尊ん

でこの句を座右の銘としていたと見える。

しかし『詩経』に出てくる「思無邪」は、少しニュアンスがちがう。

邪無きを思う

と読めるのである。

少々こまかい論議になるが、二つの読み方は根本的に別物だと思う。「邪無きを思う」というと、邪心がないことをつねに心に課していることになる。無邪の心は願望である。一方「思、邪無し」というと聖人君子のように、当たり前のこととして、いつも心中に邪魔なことが無いことになる。心がけることとは大いにちがう。

いったん司馬さんは『論語』によって書いたのか『詩経』によって書いたのか。「思、邪無し」とかいたのか「邪無きを思う」と書いたのか。

私は「邪無きを思う」と書いたのだと思う。聖人君子など、司馬好みではない。邪悪な心もたっぷり持っている、きわめて人間的なレベルが前提にあって、さてその上で邪心を持たないことを願望するという、そんなあり方が、司馬さんの共鳴するところだったにちがいない。

司馬さんは生の人間が好きだった。血の通った人間である。だから取りすました人間や、あつかましい人間は大きらいだったであろう。

司馬さんはあの黒い縁の太い眼鏡の奥の、澄んだ鋭い目から、この人は邪心の無きを願っているかどうか、静かに見ていたのではないか。

私は司馬さんがとてもシャイな人だったと思う。人見知りさえ、したかもしれない。それも人間としての努力の有無によって、仲間かどうかに分かれてしまうからである。

司馬さんのやさしさ、他人へのいたわりはたくさんの人が口を揃えていう。それも人間の弱さを十分に知っていたからにちがいない。

「思無邪」——自分の心に邪がないことをつねに思っているという、この人間宣言を司馬さんはわれわれに書き残して、逝かれたのである。

ちなみに「思無邪」の思想が、『源氏物語』の「あわれ」と似ているといったのは、江戸時代の国学者、本居宣長もとおりのりながである。司馬さんの思いは、中国古代の詩精神にも、『源氏物語』の基本の心にも通うものであった。

前回の練習問題の処理例

しょうりんじ
聖林寺

三輪山と深くつながる寺院

.....

聖林寺には三輪山の大神神社の神宮寺である（処理1）大御輪寺おおみわでら・だいごりんじ（大神寺）に関連する文書もんじょが多数残っており、また大御輪寺の最後の任職は聖林寺の出身であることなどから、これらの神宮寺と聖林寺は古くから緊密な関係にあったことがわかる。.....

じゅういちめんかんのりゅうぞう
十一面観音立像

大御輪寺から移る

この聖林寺十一面観音像は本来、大御輪寺の本尊であり、明治の初めに聖林寺に移されたものという。(処理2) 大御輪寺の創立は不明であるが、奈良時代の文献によれば「大神寺」という寺院が存在している。大神寺はその名称から、大神神社の神宮寺で大御輪寺の旧称と考えられるから、大御輪寺の創立は奈良時代にさかのぼることになる。

『延暦僧録』の釈浄三伝によれば、大神寺において浄三が六門蛇羅尼経を講じたとある。浄三は天武天皇の第四子長親王の子、智努王の僧名であり、この智努王は木工頭や造宮使、造離宮司、さらに東大寺大鎮、法華寺大鎮、唐招提寺別当など建築・工匠関係の重職を歴任した人物である。この十一面観音立像が乾漆造りということや大神寺に智努王が関係していたことからすると、この像は造東大寺司系の官宮工房の制作によると考えられる。智努王は宝亀元年(七七〇)十月に薨じているから、その制作年代はこれ以前にまでさかのぼることになる。

おおものぬしのかみ みわやま
大物主神のいます山・三輪山
おおみわじんじや
大神神社の歴史

三輪山は、奈良盆地の東辺につらなる山々の南寄りに位置しており、古くは三諸山(御諸山)とも呼ばれていた。標高四六七・一メートルの小山ながらも、笠を伏せたような、なだらかな山肌全体に古松老杉が生い茂る、秀麗優美な山である。この三輪山は、古来より全山御霊という神体山として進行され、西側の麓には山そのものを御神体として祀る大神神社が鎮座している。「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや」(額田王)と『万葉集』にも謳われているように、三輪山は古くから大和びとの心の山、聖なる山だったのである。

大神神社は三輪神社・三輪明神とも称され、平安時代には大和国の一宮(中世、国内で第一の位を占めた神社)となり、明治以後は官幣大社(明治政府によって定められた神社の格。他に中・小社もある)であった。『延喜式』には「大神大物主神社」と記されているように、大物主神を主神として、大己貴神・少彦名神を合祀する。すなわち、三輪山にいます神は大物主神ということになる。

古代からの信仰の対象

『古事記』神代巻によると大物主神は大國主神の国造りを助けに現れ、後に三輪山に鎮まったという。さらに『日本書紀』崇神巻では、国内に疾病が蔓延した際、大物主神の教えによってその子大田田根子を祭主として大物主神を祀らせたところ、疾病・災害がおさまり、国中は平穩にもどったという。大神神社の起源はこの所伝にもとづくのである。

一方、大田田根子命は、大物主神(大神)の神孫とする系譜から、三輪山付近を本拠地とした(処理3)三輪(神・大三輪・大神)氏という古代豪族の祖とされた。そのため大神神社は三輪氏の氏社となり、古代より三輪氏によって永く神主職がつとめられてきたのである。

さて、大神神社の神宮寺には、いわゆる三所寺とよばれる大御輪寺・平等寺・淨願寺などがあるが、このうち最も古いのは大御輪寺であろう。(処理4) 大御輪寺の寺名は鎌倉時代以後のものだが、それ以前には大神寺と称されていたようである。大神寺の創立は不明であるが、奈

良時代には存在していたようで、天^{てんびょう}平後期彫刻の秀作として知られる聖^{しょうりんじ}林寺の十一面観音像も同時期に大神寺に安置されていたと想像される。

処理1

- a案 ~の神宮寺であるおおみわでら又はだいごりんじ。大きいと尊敬を表す御^{おん}とワッカのワとてら、カッコおおみわでら。大きいと神とてら、トジ。に関する~
- b案 ~おおみわでら又はだいごりんじ カッコおおみわでら トジ。音声訳者注
 おおみわでらは大きいと尊敬を表す御とワッカの輪^うと寺という字を書いて、お
 おみわでら、又はだいごりんじとルビがあるところと、大きいと神を寺と書か
 れたところがありますが、このテープでは、どちらもおおみわでらと読みます。
 注終（文の始めにもどって） 聖林寺には三輪山の大神神社の神宮寺である、
 おおみわでらに関する文書が~

処理2 おおみわでら、又はだいごりんじの創立は不明であるが、奈良時代の文献によれば、おおみわでら、大きいと神とてら、という寺院が~

処理3 ~を本拠地とした、みわ氏、おおみわ氏という古代豪族の~

処理4 おおみわでら又はだいごりんじの寺名は鎌倉時代以後のものだが、それ以前には、おおみわでら、大きいと神と寺、と称されていたようである。

二通りの読みがあって意味が異なるもの (52)

裏付け	ウヅケ 証拠や保障となるもの。 ウツク 衣服などに裏を付ける	曲	キョク 曲がっていること。ふし。細かな事柄。 ウダ (ウタ) 地形が入り曲がっていること。また、そのところ。
強力	キョウリョク 強い力や作用を備えていること。 ゴウキ 力が強いこと。また、その人。	有明	アリアカ 月がまだありながら夜が明けてくるころ。 アリアカ 一晩中ともしておく灯。
柿	カキ 果物の柿 カキ 材木を斧や小刀で削った時に出来る削り屑	生口	イダシ 証言する人。 イダシ 口寄せで、巫女などが イダシ 生きている人の靈魂を招き寄せて、その言葉を伝えること。

『言葉に關する問答集』文化庁編より

「天王星」は「テンノウセイ」か「テンオウセイ」か

(答) 太陽から七番めの惑星「天王星」を「テンノウセイ」と読むか、「テンオウセイ」と読むかの問題である。

天王星は、一七八一年イギリスのハーシェルが発見した惑星で、ウラヌス(Uranus)(又は、ウラニウス、ウラノスとも)と名付けられた。ウラヌスとは、ギリシャ神話で天の神のことなので、天王星と訳された。

日本語の発音で、もともとア・ヤ・ワ行の音であるものが、その前に立つ音の関係で、マ・ナ・タ三行の音に変わる現象がある。これを「連声^{れんじやう}」と言う。

サン(m) + 申 → サンミ(二位)
 イン(n) + エン → インネン(因縁)
 セツ(t) + イン → セツチン(雪隠)
 クツ(l) + ワク → クツタク(屈惑)

などとなる。この現象は、鎌倉時代以後に生じたものとされるが、右の例のように、漢字の字音としては、今日のリン、イン、セツなどにあたるものが、sam, in, set のような中国語の発音を維持していたところから生じたものである。字音の語ばかりでなく、和語や和語と漢語の複合した場合でも、「今日は」が「コンニッタ」、「おんいり候」が「オンニリソロ」などとなることがあった。「コンニッタ」となるのは、「今日」が「コンニチ」と同時に「コンnit」ともいわれたのが、和語の「wa」に結合したからである。

これらの連声は、中世に盛んに行われたが、後には、限られた語の場合に慣用として固定するように

なったようである。先にあげた例のほか、「天皇、親王、感応、観音」などが今日までひきつがれている。

さて、「天王星」はウラヌスにあたるものとして日本の天文学で名付けられたものであるが、「天王」には、「天王如来」とか「牛頭天王」とか、以前から連声でよばれた語があって、他の「王」(親王や勤王など)やこの「天王」にひかれれば、連声となるのが自然である。もし、近代の新命名であるならば、連声しないテンオーも、「熾史」や「卵黄」のようにあってもよさそうなものである。しかし、実際のところ、「てんおうせい」を見出しに立てる辞書でも、「てんのうせい」を見よとしている。

参考のため、NHKの『日本語発音アクセント辞典』(昭和60)で、「天王星」と関連のある前後の見出し語を次に掲げておく。

テンノー	天皇、天王
テンノー(キ)カンセツ、	テンノー(キ)
カンセツ	天皇機関説
テンノーザン	天王山
テンノージカブラ	大土寺かぶら
テンノーセイ	天皇星
テンノーセイ	天皇制
テンノーハイ	天皇杯
テンノーヘイカ	天皇陛下

文部省『学術用語集』天文学編(昭40初版、昭56第二版)には、

tennosei 天王星 Uranus

とあって、学界では「てんのうせい」と読むことになる。

近畿視情協、

カセットテープ(C-90、C-60)を取り扱います。！！

近畿視情協では、今秋から、Konica XR1-90とXR1-60の2種類のテープの販売を行います。価格は90分が85円(消費税別)、60分が65円(消費税別)です。これは、近畿視情協加盟館が共同で購入することで市販より安くなっています。グループでも購入希望をされる方がありましたら、下記へお申し込み下さい。但し、最低申込単位は200本からです。また、一括して申し込む関係で、1、2ヶ月待たされることもあります。

記

お問い合わせは盲人情報文化センター内、近畿視情協事務局 宮嶋
 電話 06-441-0015

利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっています。

書 名 <分類>

- 『魂の保護を求める子どもたち』トマス・ヨハネス・ヴァイス著<教育>四六判 297頁
『ウィーンの自由な教育』広瀬敏夫著 <教育> 四六判 270頁
『日本のシュタイナー幼稚園』高橋弘子著 <教育> 四六判 210頁
『アロマテラピーのための84の精油』ワグナー・セー著 <化学工業> A5判 195頁
『シュタイナー教育を考える』子安美知子著 <教育> 四六判 222頁
『七歳までは夢の中』松井るの子著 <教育> 四六判 211頁
『私のまわりは美しい』松井るり子 <教育> 四六判 205頁
『幼児のためのメルヘン1』スーゼン・ケニヒ編著 <教育> 四六判 130頁
『臨床理学療法マニュアル』黒川幸雄著 <医学> B6判
『クッキングブック』リガル・ジヤパン編 <料理> A5判 16頁
『PHS電話機取扱説明書』日本ビクター 四六判 110頁
『殺人探究』フィリップ・カー著 <小説> 文庫 490頁
『地獄からのメッセージ』A・J. キネル著 <小説> 文庫 400頁
『ウサギの衣・食・住』大竹隆之他著 B5判 200頁
『カメの衣・食・住』徳永卓也著 B5判
『悪魔の予言』日下公人著 <社会科学> 四六判 235頁
『クリエイティング・マネー』サネヤ・ロウマン他著 <心理学>四六判 387頁
『魔法のタワシ 洗剤なしだから環境にやさしい』<手芸> 55頁
『レニン・アンジオテンシン系と心臓 1』<医学> A4判 27頁
『レニン・アンジオテンシン系と心臓 2』<医学> A4判 27頁
『取手方式で腎不全に克つ』椎貝達夫著 <医学> 四六判 242頁
『福祉国家はどこへゆくのか 日本・イギリス・スウェーデン』

- 『シバ謀略の神殿』 ジャック・ヒギンズ著 <小説> A5判 250頁
 『腎臓病の生活ガイド』 平田清文著<医学> B5判 215頁
 『循環器病の診断と治療』 大阪府立成人病センター編 <医学> A4判 300頁
 『ディスカバリー世界の真相への接近』 <宗教> B5判 308頁
 『ヨセフとその兄弟 II』 <宗教> B4判 620頁
 『ヨセフとその兄弟 III』 <宗教> B4判 562頁

今回引き受けて頂いた 原本とグループ

『シュタイナー教育の基本要素』 ルドルフ・シュタイナー著	テンプルライブラリーにしのみや
『灯創刊45周年記念合同句集』	〃
『こんな「歴史」に誰がした』 渡辺昇一著	〃
『灯7月』 原あつし著	〃
『灯8月』 原あつし著	〃
『灯9月』 原あつし著	〃
『八百万ドルを探せ』 ウォルター・ソルス著	〃
『SUNSHINE ENGLISH COURSE Teacher's Manual』	近畿視情協英語チーム
『わたしの怖い体験 本当にあった心霊現象』	コスモス

お知らせ

専門音訳講習会（図表コース）のご案内

専門音訳講習会の図表コースが97年11月29日（土）より10回の予定でスタートします。希望者は盲人情報文化センター 清水までご連絡下さい。

日 時： 11月29日（土）～ 98年2月14日（土）
 10時30分～12時30分（毎土曜日）

試験日： 11月8日（土）10時～12時

尚、点字図書館および公共図書館には、別途、近畿視情協事務局より聴講生の派遣依頼も行っていきます。点字図書館、公共図書館に所属されているグループの方は所属館へもお尋ね下さい。